

出版情報

書名・件名	厚生白書(平成10年版)
副書名	少子社会を考える—子どもを産み育てることに「夢」を持てる社会を—
編集者・監修者	厚生省
所在地	東京都千代田区霞ヶ関1-2-2
国名	日本
郵便番号	100-0013
電話番号等	03(3503)1711
発行日	平成10年6月15日
発行日	平成10年6月15日
ISBN	ISBN4-324-05481-9(5180005-00-000)
価格	2571円

厚生白書の刊行に当たって

平成10年版厚生白書をここに公表します。

戦後、我が国は、生活環境の改善や医学の進歩などにより平均寿命が著しく伸び、世界有数の長寿社会となりました。昭和30年から50年ごろにかけての我が国は、平均寿命の伸長と安定した出生率が相まって総人口が増加するとともに、豊富な労働力などを背景に、経済は高度成長を続けました。

しかし、昭和50年代以降、我が国は、晩婚化の進行などを背景として、出生率の低下とともに子どもの数が減り続け、「少子化」が急速に進んでいます。21世紀の半ばには、総人口は今より約2割減少するとともに、国民の約3人に1人が65歳以上となることが見込まれており、今後、人口減少と高齢化が同時に進むというこれまでに経験したことの無い時代を迎えることが予測されています。このような少子化の進行は、将来の我が国の経済社会に様々な深刻な影響を及ぼすことが懸念されています。

昨年10月、人口問題審議会で「少子化に関する基本的考え方について」と題する報告書が取りまとめられました。報告書は、少子化の影響への対応とともに、「少子化の要因への対応をする必要がある」との考え方を打ち出し、その政策的対応の中核として、固定的な男女の役割分業や雇用慣行の是正と、育児と仕事の両立に向けた子育て支援の2つを挙げています。

これらの施策が推進される必要があることは言うまでもありませんが、出生率の低下の根本的な原因は、経済成長の過程で、多くの国民の生活や社会の形が画一的・固定的になり過ぎた結果、結婚や子育ての魅力がなくなり、負担感が増してきたことにあるのではないのでしょうか。そして、出生率の回復を目指す取組みとは、こうした原因を取り除き、「子どもを産み育てることに夢を持てる社会」を作る取組みであり、このためには、自立した個人が相互に結びつき、支え合い、「家庭、地域、職場、学校」といった生活に深く関わる場に多様な形で関わっていけるような社会をつくることが求められているのではないのでしょうか。

今年の白書では、少子化が進行し始めた20世紀後半、特に最後の四半世紀を振り返り、少子化の背景を探りつつ、「子どもを産み育てることに夢を持てる社会」に向けて、自立した個人の生き方を尊重し、お互いを支え合える家族、自立した個人が連帯し支え合える地域、多様な生き方と調和する職場や学校の姿を展望してみました。人口問題審議会の報告を踏まえ、少子社会について更なる問題提起を試みたものです。

また、白書では、介護保険制度の創設、医療制度改革、年金制度改革を始めとする社会保障構造改革、感染症対策や廃棄物対策の推進、また、政府全体としての課題である行政改革に対する対応など、厚生行政の各分野における主な動きと今後の改革の方向について紹介しています。特に、血液製剤によるHIV感染の問題につきましては、厚生省は、これまでの経験を的確に生かすことができなかったことを深く反省し、今回の事件を重い教訓として、恒久対策の推進に全力を尽くすとともに、医薬品等の安全対策の一層の強化に取り組むなど、このような健康被害が再び生じることがないように、最善・最大の努力を重ねてまいります。

この白書が、国民の皆様幅広く活用され、少子化についての議論の手掛かりとしていただくとともに、今後の厚生行政についての一層の御理解と御協力をいただくための一助となれば幸いです。

平成10年6月 小泉 純一郎 厚生大臣

(C)COPYRIGHT Ministry of Health , Labour and Welfare